

Title	<紹介>茅島篤編著『日本語表記の新地平：漢字の未来・ローマ字の可能性』
Author(s)	久田, 行雄
Citation	語文. 2013, 100-101, p. 163-163
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70927
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

茅島篤編著『日本語表記の新天地―漢字の未来・ローマ字の可能性―』

久田 行雄

本書は明治以後から現代を中心に、日本におけるローマ字表記に焦点を当て、現在使われている漢字平仮名交じり文ではなくローマ字文について、その可能性を様々な角度から検討したものである。グローバル化が進む現代において、国際語としての日本語、つまりソトから見た日本語の表記という視点を取り入れ、その表記法について改めて考えることを促す内容となっている。

本書の構成は以下の通りである。

【第1部 日本語表記の可能性】江戸時代 東西比較文化の論
杉本つとむ／漢字文化圏から漢語文化圏へ 宮島達夫／平成22年告示 常用漢字表考―字種「俺」を通して見た問題点― 岩淵匡／ローマ字日本語の可能性 竹端瞭一

【第2部 国語教育とローマ字】義務教育への国語ローマ字教育の導入―回顧と展望― 茅島篤／ローマ字実験学級―占領軍の目に映った日本の言語改革― 高取由紀／漢字とローマ字 清水正之／分ち書き「いま」と「むかし」―田中館愛橋、田丸卓郎、寺田寅彦を読む― 岩瀬順一

【第3部 日本語改革のゆくえ】上田万年と明治の文字政策 清水康行／田中館愛橋とローマ字 松浦明／第二次大戦下のローマ

字運動と石森延男の戦時下の作品 前田均／占領下の国語改革をめぐる言説―国字改革に関する誤解を中心に― 茅島篤／それでも漢字はなくなる 野村雅昭

本書の編者である茅島篤氏は、ローマ字教育の歴史的経緯を丁寧にたどりながら、日本におけるローマ字表記に関する問題点を指摘し、その問題点から日本語が国際語となるための第二表記としての活用など、今後の日本におけるローマ字表記をどのようにしていくべきかを説いている。

第1部では、漢字・漢語という文化圏（宮島論文）、常用漢字表のあり方（岩淵論文）という視点から日本語の表記を捉え直しており、第2部では、戦後日本で行われたローマ字教育の実態を詳しくたどり（茅島論文、高取論文）、また、実際のなローマ字文を書くための問題点が考察されている（岩瀬論文）。第3部では、国語改革として行われた政策からローマ字表記を捉え直し（清水康行論文、茅島論文）、日本語表記においてローマ字がどのように生かされるべきかを考察している。また、ローマ字運動に深く関わっていた田中館愛橋や児童文学者である石森延男に着目し、ローマ字運動の意義を改めて説いている（松浦論文、前田論文）。

ローマ字と日本人との歴史を伝え、国語国字問題を意識させるなど、改めて日本語の表記問題を考えさせてくれる一冊である。

（くろしお出版、二〇二二年一月、三一〇頁、三、八〇〇円）
（ひさだ・ゆきお 本学大学院博士前期課程）